

2023. 12. 3. 主日礼拝説教  
聖書： マタイによる福音書 7章7～12節  
『求めなさい』

「求めなさい」という小標題が掲げられます。おそらくこの箇所はルカも用いていることからQ資料に由来していることが推測されます。ルカの並行箇所(11;9-12)は「主の祈り」に始まる文脈に位置し、「求めなさい」「探しなさい」「門をたたきなさい」の三つの動詞は神に向かって祈ることを強く勧める言葉として記されています。

ところが、本日のマタイでは「主の祈り」(6;5-15)から遠く離れたところに位置しているのです。しかし、「求めなさい」という勧告を履行する者は必ず聞き届けられるという約束(7,8,11)の繰り返しを通して、マタイはこの「求め」が祈りであることを示しています。それは「求め」に対応して応えられる「与えられる」という言葉が、直訳すれば「与えられるであろう」という受動態の未来時制なのですが、これは人が主語の時にはまず用いられません。神が主語の時だけに用いられる用語なのです。それも祈りに対しての応答として用いられる言葉であるのです。ですからマタイにとって「主の祈り」の文脈でなくとも、この「求めなさい」という勧告はまさに祈りそのものであるということが分かります。

それではわたしたちが「求めるべきもの」とは一体何なのでしょう。

わたしたちは人生の振り返りの中で、ともすれば「与えられ・見つかり・開かれる」体験より、実は「そうではなかった」体験の方が多かっただけです。それでは信仰が足りなかったのでしょうか。「求め・探し・叩き」が弱かったからでしょうか。

もちろんマタイはそんな自己充実のための対象を頑張って獲得しなさいなどを綴ったわけではありません。努力の積み重ねが実りをもたらすなどという構図を描いたわけではないのです。

「求めなさい」には目的語が記されておられません。それは山上の説教全体から理解されるべきものだからです。マタイは9-11節に父子のたとえを挿入して「愛の教え」を示し、「これこそ律法と預言書である」と締めくくります。つまり、「求める」対象はわたしたちの「質」なのです。それは愛において新しく成立す

る人と人の関係であり、さらに神と人の関係であるとマタイは言及するのです。このイエスの提案する「愛」を求め、実行することにおいてのみ律法は克服され完成されるというのです。

わたしたちは「与えられない・見つからない・開けてもらえない」と人生をつぶやきます。生きているのが嫌になるようなことがたくさんあるのです。矛盾や混乱の中に迷いっぱなしであったりするのです。そんな中に身を置いていると「求めなさい」という言葉を勘違いしてしがみついてしまうのです。それは明白さを求め続けたいという衝動なのかも知れません。矛盾や混乱に対して明白さを求めてしまうのです。しかし、納得できるまで求め続ければいつかは必ず何もかも明白になるというのは幻想にしか過ぎません。

実はわたしたちは求めるばかりではなく、求められているという面があるので。求めても、探しても、叩いても、決して明白にならない現実の中で嘆くのではなく、「求められて在る」というもうひとつの人生へのいざないがあるので。イエスの愛の教えとは、腹を立てること(5;21 以下)さえ否定する徹底的な愛に根ざした「求め」に立ち帰って生きることが提案されてゆくのです。